

恩師からのメッセージ

回想

榎一雄先生

(在職 昭和36年～昭和45年)
後藤 勝



私が初めて先生を横浜のお宅にお訪ねしたのは、昭和二年の五月であった。あたりには、まだ横浜大空襲の傷跡があちこちに残っていた。緊張した面持で玄関を入ると間もなく先生が出て来られた。スラリとして丸刈りの和服姿であった。卒業論文のあらましの予定を申しあげると一冊の洋書を取り出された。イギリスのチベット学者F・W・トーマス氏のものであった。「実は借りた本なので二週間を限り貸します」とおっしゃった。大急ぎで必要部分を抄出して期限通りお返しした。そしてその年九月に「唐朝前期の唐

蕃関係」(四百字詰一八〇枚)を卒業論文として提出した。

それから七年、二九年に「唐代における西域南道の経営」を恩師有高巖先生の古稀記念論文集に発表した。暫くして恩師鎌田重雄先生からの便りに、「先日榎先生に会ったら、君の論文に関心を持たれ、いろいろ尋ねられたよ」ということであった。そこで早速、抜刷と挨拶状を七年ぶりに差上げた。それ以来、毎年年賀状と、小論を発表するごとに抜刷をお贈りした。几帳面な先生はその都度感想をお寄せいただいた。

昭和四二年のこと、恩師山崎宏先生の退官記念論文集に「吐谷渾の佛教」という小論を公にした。吐谷渾は今日の青海省にいた鮮卑系遊牧民の小集団であったが、東西交渉史上に重要な位置を占め、当時学界の主要テーマとして先学の論文も公にされていた。小論は仏教流通の上でも特異な貢献をしていたことを新史料―西域求法高僧伝―の発見により解明したものである。抜刷をお送りすると、一週間ほどして、四五枚の論評を寄

せられ、新しい見解として評価をいただいた。同時に二、三誤字の指摘もいただいた。

なんと小生の引用文については原典に当たって確認しておられたのである。研究に対する厳しい態度と小生ごとき同学の末輩に対しても温かい励ましを寄せていただいで感激したしだいである。

また昭和五五年に「後漢書侯瑾伝について―漢代燉煌の一知識人―なる小論を公にした。二世紀ともなると辺境燉煌にも漸く漢文化が根を下しつつあったことを後漢書文苑伝の僅か一三〇字余りの記述を手掛りに追究したものである。

それから二―三年後、先生は、「漢代燉煌の文化」なる一章を「講座燉煌」に発表された。早速「侯瑾」についてどのようか考えておられるかを見たがないのである。早速小論をお送りすると例の如く、数日後に返事を頂いた。先生も侯瑾伝には気づいておられず、これは小生の発見であること、従って今後改訂の機会あれば必ず小生の名前を記して紹介させてもらう―との御返事を頂戴した。研究に対する厳し

さとともに謙虚さを改めて教えられた思いがした。

私は公務のかたわら、十余篇の小論を世に問い、その中の数篇は新見解として一定の評価を得ることができた。改めて先生始め諸先学に感謝申しあげる次第である。

榎一雄先生略歴(一九一三―八九
東京大学教授(東洋史)
財団法人東洋文庫理事
榎一雄著作集(十二巻・別巻二)

思い出と近況

武藤 映忠

(在職 昭和39年～昭和47年)



私は戦前の岐中時代には、生徒として、戦後は教師として岐阜高校に八年間お世話になりました。そして今は、定年退職して趣味に生き、早や齢八十五才となりました。「金

華城頭月冨えて、万象すべて、しじまなり。…」と口ずさみながらキャンパスに絵の具を塗りつけております。

私の名「眞忠」は「あきただ」と読みますが、誰も正しくは読んでくれません。岐中生時代の組担任は詩人の殿岡辰雄先生でした。君の名は「てんちゅう」と呼ぶことにしてよいかということ、呼び易いためか英語の時間には一時間に何回も指名されてシボられました。勿論チャンペラは一切使いませんので予習は大変でした。

近況といえば、油絵の他に旅行を楽しんでいます。孫が三人で上二人が男の子です。孫を連れて行くと楽しいこともあり、身体を動かすこともあって老化を防いでくれるようです。甥がオーストラリアで生活しているので数回孫を連れて出かけました。国内では沖縄や北海道に引っ張られて行きます。体の良い子守りですが、こちらも遊んでもらっているようです。

最近、年金の記帳漏れ等のような手抜きが多くなったようです。先日誰かが言っ

いたように、人生の上り坂や下り坂のように心に用意があるときは用心しますが、ま坂という坂は突然やって来ますので対応を誤らぬようにしましょう。若いうちはよいのですが年を重ねてくると「惰性」がありますので、お互いに気を付けましょう。



卒業生の皆さん、お変わりございませんか！ 相変わらず健康でご活躍のことと思います。岐阜高校でお世話になった九年間は私の人生の原点であり、「宝」です。振り返るたびに当時の未熟さに赤面します。

今回、会報に原稿を依頼されたのを機に、思い出の一端を書くことにします。

■柔道部顧問の思い出

赴任した時、練習は週三回で、一時間の稽古でした。どうにかして毎日の練習にしようと話し合い、賛成してくれた時



の部員は今でも忘れません。その後、部員と一緒に中津川から恵那山に登ったこともありました。また、県新人大会で優勝したこと、東海大会に何度か出場したことなど、たくさん思い出があります。

しかし、その中でも格別に印象に残っているのは、インターハイ出場が確実と言われた年に修学旅行と県予選の日程が重なり、ベストメンバーで出場できなかったことです。次年度からは、修学旅行は日曜日を避けて計画されるようになりました。

また、創立百周年記念誌に柔道部の歩みを書かせていただいたことも大きな思い出です。

■林間学舎の思い出

赴任して校務分掌が林間学舎の係になりました。といっても、学舎を造る仕事です。初めて上宝村の中尾に行き、雄大な北アルプスの嶺嶺を目前にした時の感動は今なおありと浮かびます。学舎の建設予定地に立ったときには、同窓生諸氏の母校愛をひしひしと感じました。

その後、地鎮祭から竣工まで、いろいろと勉強させていただきました。ききましたが、特に思い出しているのは、いよいよ「しおり」の作成の段階で日程の検討や登山のコースなどについて何かと苦労したこと。とりわけ登山については、どの山にするかを決めるために近くの山をいくつも登り、最終的に焼岳に決定しました。

焼岳は危険箇所が多く、何度も点検に歩きましたし、地元の人々の協力を得て樹林を伐採し歩道を確認しました。そして最初の「しおり」が完成したのです。その時一緒に登り、ご指導いただいた主任

の先生は、二年前に惜しくも他界されました。先生との最後のお別れの時、懐旧の涙で大泣きしました。

■担任の思い出

我が家には、卒業記念のマッチ箱が置いてあります。これは、私のクラスの江崎三芳君が作ったものです。彼は残念ながら若くしてこの世を去りました。このマッチ箱を見るたびに、修学旅行や数々の思い出が鮮明に浮かびます。

また、一年生を担当した時、ホームルーム委員のリードで文化祭に発表することになりました。当時は、一年生は発表がなかったわけですが、我がクラスは立候補しました。題は「どうしてこんなに悲しいのだろう」でした。

林間学舎の登山で独標に登り、クラス全員で写した笑顔の写真があります。これは私の大事な一枚です。

思い出は尽きません。全て、若き良き時代の思い出として、まぶしく輝いています。

最後に、岐阜高校の益々の発展と各界でご活躍の卒業生の皆様のご健康とご多幸を心からお祈りします。

昭和四九年の頃

(在職 昭和44年～昭和54年)

大矢 邦彦

昭和五〇年三月に卒業された方たちの三年九組の担任をした関係で、同窓会「会報」への寄稿を依頼されました。担任といっても、竹下喜美雄先生が九月から病気休養されることになり、その後の僅か半年間だけのことでしたが、竹下先生は、今は故人となつてしまわれました。この場をお借りしてご冥福をお祈り致します。

君たちが一年生のときは、私は三年生の担任をしていました。この学年とは一・二・三年と、いずれかの組を担当して持ち上がってきました。いわば三年間を共に過ごしてきた馴染み深い学年でした。君たちが二年生になった年には、また一年生の担任として新学期を迎える心算をしていたのですが、なぜか三年生の担任となり、同僚たちからは「留

年したね」と揶揄されたりしました。どの卒業学年も卒業アルバムが手元にあり、時に眺めて懐かしんでおります。

さて、君たちが三年生になった昭和四九年は、高校入学者選抜に学校群制度が導入されました。そして、岐阜高校で長年教鞭をとってこられ、岐阜高校の主役的存在であった多くの先生が異動されました。しかも郡部の高校に転勤されていかれたと記憶しております。岐阜高校も学校群制度に戸惑いを隠せず、私自身は担任を外され進路指導部に所属して、専ら二年後の大学入試に備えるべく諸々の対策に追われておりました。これまでに積み重ねてきた岐阜高校の資料やデータのみでは不十分で、岐阜高校が群を組んだ加納高校と長良高校にも出かけて行き、データ収集や進路指導の研修とかもしておりました。

正直に申して、今、クラス

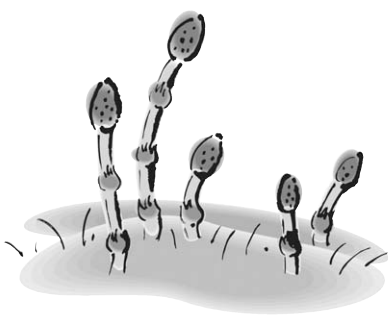
の面々の顔が浮かんでこないのです。手元には君たちの卒業アルバムもありません。今回、この原稿を書くにあたって園部利彦氏にお借りし、ようやく三年九組の全体像を思い出せるありさまです。そのアルバムのクラス写真には、担任としての私の姿がありません。三年九組の諸君の中には、私が担任だったのかと訝る人もいるのではと思っております。君たちも進路決定という重要な時期に担任が交代し、あまり馴染みのない男が担任となつたことに不安も感じたことでしょう。

そのアルバムの中に「小さな翼ではあるが、それに身を委ねて、新しい社会を創るため、大空に向つて舞い上がるう」という内容の詩を見付けました。恥ずかしいことですが、今初めて私は知りましたが、担任としての存在が薄かったことに自責の念を覚える一方で、その頃の君たちの思いや決意に触れて安堵しております。自らの力で人生を切り開いていく素地を十分備えていてくれたんだなあと感服しております。

担任としては前述のようであったことは自他ともに認めるところですが、数学教師としては、君たちの三年間のどこかで、一部の人たちにはあるがお目見えしたことでしょう。楽しい授業であったことが思い出されてきます。M君、S君、T君のことなど……。いずれも「さすがは岐高生だ」という好印象ばかりであります。

与えられたスペースに限りがあり、ここにアレコレの紹介ができないのが残念ですが、私一人の人生の糧にして戴くことにお許しを願って、この寄稿文を終わります。

最後になりましたが、岐阜高校同窓会及び岐阜高校の益々のご発展をお祈り致します。



チエ・ゲバラへの旅

(〇四年二月～〇五年二月)

(在職 昭和46年～昭和60年)

高田 睦

数年前にキューバから届いた女友達の絵葉書「ベレー帽を被ったひげ面の男の笑顔と「ゲバラに夢中です」の一言に、思わず「若きゲリラ戦士に憧れるなんてうぶだこと」と吹き出しました。が、その純真で涼しげな眼差しに少し好奇心をそそられました。



■ハバナ《革命広場》

カストロ政権の主要機関が立ち並び、国家的な行事の際

には数十万人が集うという巨大広場に、ゲバラのモノユメントがあります。一筆書きのタッチで内務省の壁を飾る凛とした顔、そして「勝利の日まで限らない前進を」という彼の言葉…。

アルゼンチン生まれの医師エルネスト・チェ・ゲバラは、二八歳の時、メキシコに亡命

中のカストロと出会い、「キューバを解放するか死ぬかだ」という彼の熱い意気に共鳴して、

「これほど高邁な理想のためなら他国で死んでも死に甲斐がある」とキューバ革命に身を投じたといえます。ゲバラは、

その行動力と知性と不屈の闘志と献身を以て勝利への道を拓き、さらに新政府の中核として国家建設の一翼を担いました。広場の顔はキューバの

今を見つめています。

■ハバナ《カバーニャ要塞》

夜の要塞は大砲の儀式の見物客で溢れていました。群集は、次に要塞内のゲバラ博物館へと移動し、司令官ゲバラの執務室に佇みます。五九年一月、ゲリラ軍が二年余りの過酷な闘いに勝利して、バティスタ独裁政権の崩壊を宣言した舞

台です。運河を隔てて市街地の灯が見えます。

■ハバナ《革命博物館》

かつての大統領官邸に、革命軍の蜂起から勝利に到るまでの経緯と戦士たちの軌跡が紹介されています。ゲバラの原点は、ラテンアメリカ社会の貧困を痛感した南米放浪の旅にあります。

彼は、先進大国と独裁者の圧力を排除すべく、五四年にグアテマラの闘争に参加しま

した。しかし、彼が味わったのは挫折と失望でした。二年後、ゲバラはカストロに従ってメキシコからキューバへ船出しま

しました。総勢八二名。その時の八人乗りのヨット『グランマ号』は博物館の裏庭に展示されています。

■サンタクララ《記念広場》

五八年、ゲバラの部隊はサンタクララの戦いで勝利を確定的にしました。広場の壇上には銃を構えたゲバラの像が立ち、傍らに『カストロへの訣別の手紙』（六五年）の石刻が並んでいます。「世界の他の国が私のささやかな努力を求めている。キューバの指導者としての責任から、あな

たなら拒否せざるを得ないことを私ならやれる。別れの時が来たのだ」—キューバを去ったゲバラは、アフリカ・コンゴの闘争に加わった後、六年、ラテンアメリカ全土にわたる大陸革命を夢見て、キューバ軍の精鋭一七名とともにボリビアへ潜入しました。そして山中でゲリラ戦を展開した末、六七年に政府軍に捕縛され、銃殺されました。享年三九歳。

戦士たちの遺体は九七年にキューバへ送還されました。広場の地下の霊廟は、彼らが眠る厳粛な空間です。

■バラデロ《ゲバラ讃歌》

カリブ海のリゾート地で、流しの四人組が歌う『アスタシエンプレ（ずっと永遠に）』に聞き入りました。「君の革命的な愛が、君を次の企てへと導く、ゆるぎない事を期待して、自由を求める君の力が」、

「ここにはつきりと表れている、親しみあふれる透明性、君の愛すべき存在よ、チェ・ゲバラ司令官」—スペイン語の切ない響きが、旧植民地国の宿命と革命に殉じた人の気高さを伝えていきます。

頑迷固陋

佐口 修一
(在職 昭53年~平成4年)



公立高校を退職してからもはや十五年経ちました。退職後六年間鶯谷高校に勤めたので、職業から自由になっただけです。

七、八年前どういいうきっかけだったか、そのころはまだ岐阜にもCD店があつて、ふと購入したCDが内田光子の演奏するシューベルトのソナタでした。再生装置などありはしない。ちゃちなラジカセ(今では死語)を持っていただけでした。しかし、そのピアノを聴いているうち、何か異様な感覚に襲われました。体が震える、低血糖になったかと

いう感覚で、これがクラシック音楽に夢中になる入口でした。その後、いかに私の体にクラシック音楽が欠如しているかを思い知りました。何しろガキの時代は殆ど猿を仲間とするような環境にいたし、音楽と言っても夜しか鳴らない「国民型ラジオ」と、浪花節と軍歌のレコードが聞けるゼンマイ仕掛けの「蓄音機」があるだけでしたから。

そこでクラシック音楽が聴ける体作り(！)に取りかかりました。ラジカセよりは多少ましなプレーヤを購入し、一日六時間以上音楽を聴き、体質改善にいどみました。現在では一日二時間程度聴くだけですが、ルネサンス音楽からメシアンまで何とか耳に入るようになりました。(わかる、わからないというレベルは別問題)ブルックナーなどなかなか素直に耳に入ってこない音楽も沢山あります。

もう一つはカメラ、二〇〇二年六月にニコンから「D100」というデジタル一眼レフカメラが発売され飛びつきました。何と言ってもデジタルカメラはコンピュータと相性がよく、

所謂「現像処理」がコンピュータを使って出来る。さらに階調や色調、コントラストなどをいじるといってお遊びが出来て楽しいので、これまた矢鱈に深みに嵌まり現在に至っています。

写真は上達しませんが、写真を実によく外へ出るようになりました。何か撮る物はないかときよるきよる町中や山野を歩き回る。外出や被写体探しが多分、脳を刺激してくれているのじゃないかと勝手に思っています。

デジタル処理に必須のコンピュータは何かにつけての親友です。コンピュータは愚にもつかない私の作業に機嫌よく付き合ってくれます。老人の相手を嫌な顔もせずにする者がどこにいますか。Macに感謝・感謝です。

現在、写真ギャラリーの更新と、CD日記を専らの仕事としています。人間『仕事』がないといけません。一日一日の目標なんです。気が向いたら、たまに覗いてやってください。

こういう記事には当時の回想などを書くのが常套である

とは思いますが、碌な指導も出来なかった私としては恥じ入るばかりで当時を思い出す勇気がありません。自分勝手な「近況もの」でお茶を濁しました。悪しからず。

(私のURL)

<http://www.ccn.aitai.ne.jp/~sag/>



(在職 昭和56年〜平成7年)



私は数学の教師を生業としてきました。数学の面白さ、楽しさ、奥深さを教えたいと思っただけで日々過ごしてきたつもりです。

「なぜ」「どうして」ということを考えることが小さい頃から好きでした。だから、

納得できないことには、身体が動かず、不器用な人間だと言われ、それは、今も変わりません。

私は、大学で数学を学びました。何を学んだか。それは「数学の奥の深さ」と言えませんが、格好良いのですが、「数学とは分からないものだ」と言うことでした。私の大学時代は、世に言う大学紛争の時代で、東大の入試が行われなかった年もありました。激動の時代で、自分達でこれからの社会を作っていくのだ、という情熱に溢れた時代でした。

私は、昭和二二年、終戦二年目に生まれ、戦前の軍国主義教育から変わった戦後の民主主義教育を受けて育ちました。小学校時代には、もちろんいじめはありました。そんなことは日常茶飯事で、今日の敵は明日の友と、日に日に変わる敵、味方の中で、人間関係を学びました。今から思うと子どもは残酷な面があります。でも、そのなかで、誰かに守られ、作られた関係ではなく、自分たちで関係を作っていくことを学んだと思います。

そんな学校生活で先生から学んだことは、「自分と友だちを同じように大切に」ということでした。先生から、夢を感じるようなことを教えてもらい、今から思うと、先生たちに夢やロマンを感じたことが多くありました。それは、新しい「日本国憲法」に支えられ、新しい日本を作っていくという、自由で個性的な魅力を持った教育がなされていたからだと思います。

中学校二年の時、社会科の最初の授業で、先生から「憲法の前文」を読め」といわれ、教科書の「はじめに」を読みかけて、『憲法の前文』の意味をコンコンと説明されたことを今でも鮮明に覚えています。その授業は、憲法の前文を一カ月学び、一年かけて、憲法の全ての条文と民法を少し学びました。生徒からも沢山の意見が出て、大変印象に残る授業で、私の生き方にも影響を与えたものでした。

教師になつてから「自由を拡張、自分自身の発想を伸ばす」、それが数学を教える一つの目的であり、今でも変わらぬ私の教育理念です。その

ためには、「なぜ」「どうして」ということを考えることが、とても大切だと思います。とても理不尽な事が多い現代社会、だからこそ、信念を貫きたいと思います。

昨年八月に岐高三年二組の同窓会によれば、還暦の祝いでプレゼントされた「赤い万年筆」のおかげもありますが、この年になって、数学の書物を多読し、大学時代の本も引き出し「分からなかった数学の問題」で解決したのもありました。

教師生活は残り少ないのですが、数学の面白さと、日本国憲法の大切さを伝えていきたいと思いつつ、今の時代を生き抜く節目の年にしたいものです。



昔と

変わりません

水野 秀則

(在職 昭和57〜平成6年)



同窓生の諸君、お久しぶりです。今年幹事学年の昭和六〇年卒のみなさんを二・三年生の時に担任をしてから、もはや二〇年余が過ぎてしまいました。当時は二〇代後半だった私も、写真のようにいい年齢となりました。

「恩師」として何か一言というのは、いくつになっても気恥ずかしいものです。特に自分が教師として未成熟だった若い時に教えた生徒諸君には、「失礼しました」としかいいようがありません。時々、「昔授業でもらった日本史のプリントを持っています」と

かいられますが、涙出るくらい嬉しいと同時に、「失敗作」を「大事」にしてもらっていることへの恐縮の思いも強く湧いてきます。

それと同時に、次の思いも頭から離れません。大学を出て数年の若造が「教師」だと言ってみなさんの前に立つことができたのはなぜか。知識も教員としての技術もカウンセリングガイドも何もかもほとんどなかった自分が、担任などと大きな顔をすることを許してもらったのができたのはなぜなのか。

今思い起こすとそれは、みなさんと一緒にひたすら自分も「勉強」していたからだと考えています。みなさんの高い学ぶ意欲が私により完成度の高い授業や活動の必要性を促し、それに応えようと頑張ったことが、また授業をおもしろくしていったと思っております。教師自身が何か高みを目指して飛ぶ矢のような勢い（ポテンシャル）を持っていて、授業にその他の活動においても、授業にその他の活動においても、勢いよく取り組む。そのことが、生徒諸君にとっても有意義な時間と空間を作

り、ともに「成長」できていくことになる。

私にとって岐阜高校と生徒諸君は、そういう幸福な時間を創造してくれた場所とパートナーでした。偉そうなことをいいましたが、これは何も教師だけのことでなく、ものを創ること、自然や人と接すること、すべての職業においても同じなのでしょうね。

現在は華陽フロンティア高校に勤務しています。以前岐阜高校の敷地内にあった華陽高校が発展した学校で、岐阜高校のような全日制のいわゆる進学校とは違って、昼間・夜間三部制の定時制と通信制を併置した学校です。通信制は日曜日にもスクーリングがありますから、実は岐阜高校同窓会総会当日も私の学校は「営業中」です。生徒数は千七百〇人以上で、これは岐阜県下で最も多い在籍者数となっております。

生徒諸君は不登校の経験者をはじめ、精神的・身体的・経済的に困難を背負った生徒がほとんどで、画一的な知識注入の教育とは対極にある、一人一人の心に話しかける手

作りの教育を進めています。私自身は、平成一八年までの七年間は教育委員会事務局に勤務し、また、現在は管理職ですから、もうあの日本史の授業は随分長い間やっていません。

それでも、五三歳になった今でもスポーツテストと一緒に受け（平成一九年の五〇m走は、七秒八でした。往年の「快速」はもはや望むべくも

ありません。）、体育をはじめとしていろんな授業に乱入して興味関心を高め、さらにセンター試験の問題には他教科も含めて挑戦して頭を悩ませるなど、「あのころ」と同じく、日々「勉強」を続けています。

みなさんと過ごした日々に感謝するとともに、みなさんの今後のご活躍をお祈りして、筆を置きます。



在校生2年 津田 聖

同窓会だより

藍水くらぶ 岐高女生ここに集ひて

村瀬 喜代子
昭和一四年卒



私たちの母校岐阜高等女学校は、さきの大戦中に北野町から雲雀ヶ丘にその居を移し学舎（まなびや）は昭和二〇年七月の岐阜空襲によって灰燼に帰し、戦火の犠牲となりました。

戦後二三年学制改革によって岐阜中学と岐阜高女の統合があり、男女共学、歴史と伝統を誇る岐阜高校として再発足しました。

「岐高女」は、良家の子女、才女才媛が集い、良妻賢母を

校風とする名門、県下屈指の誇り高い女学校でした。

その旧制高等女学校の栄えある生徒として、昭和二九年までに卒業したものが心の寄りどころとしているのが「藍水くらぶ」でございます。

平成一九年度の総会は一〇月三日、長良川畔の岐阜都ホテルにおいて二百三十八名という素晴らしい人数の出席を得て、盛大に開催することができ、晴れがましい思いをしました。

来賓に岐阜高校同窓会長、野々垣孝様を迎え心のこもる御挨拶を頂きました。当日の出席会員は年齢九一才から七四でそのうち八〇才以上が八一名という矍鑠たる女性パワーあふれる集いでした。

恒例の式次第は物故者追悼の黙祷から始まり、創立記念の歌「姫小松」を合唱、村瀬代表より、一年一回の楽しい集いの今日、元氣に出席でき旧友と心かよふ話し合いができる「しあわせ」をお土産にと、おしゃべりタイム十分です。

例年通り高齢者お祝いの記念品贈呈。今年も昭和一五年卒業、満八五才一四名の方で、代表の市橋智恵さんからお礼の言葉がありました。本年は、特別長寿で御出席の九一才前代表の高木あいさん、安藤みちさんには御祝金を差しあげました。

田代里江さんより会計報告があつて式次第が終り懇親会へ。ことしも和氣藹々、会食を楽しみ、心ひとつに青春回顧。心ゆくまで旧交を温め若がえり、ステージでは「雲雀ヶ丘合唱団」三〇名のいつものながらの美しいハーモニー、

素敵なコーラス。「花」「ローレライ」「赤トンボ」「美しく青きドナウ」うっとりとして聞きほれて、そして口ずさみ、ワルツに心はずんで会場は盛りあがります。フィナーレは岐阜高等女学校校歌斉唱。作詞佐々木信綱、作曲下総皖一。歌人、作曲家として斯界で名を馳せた大家作の誇るべき校歌です。

名残つきない秋の日の宴は終わりました。お元氣で来年の再会を約してサヨナラ。

早過ぎし日の面影残すなつかしさ
友ら語らひ時を忘れて
校庭でラケットふりし
日をしのぶ

足立 美代

残照美しくそして愛しく

村瀬喜代子

平成二〇年度
藍水くらぶ 総会のお知らせ
日時 平成二〇年一〇月三日(土)
場所 岐阜長良川岐阜都ホテル
岐阜駅、柳ヶ瀬までお迎えバス用意致しますのでお誘い合わせでぜひ御出かけ下さい。

激動の中学・高校時代

関谷 崇夫
昭和二四年卒(岐高二終業)



昭和一九年四月、私達二三〇名余は岐阜県立第一中学校に入學、昭和二四年岐中最後の卒業(新制岐高の二年修業)、以降学区制により指定校へ転編入という激動の中高生活を過しました。

昭和二〇年七月、米軍の空襲で校舎も焼失、八月の終戦に至る一年半の間、私達は一通りの教科の他に、軍事教練や川崎航空機での工場作業、食糧難での校庭まで掘り起しの芋作りに明け暮れの、現代では想像もつかない日々でした。

一億総決起の戦時色に彩られた学園、そして将来軍人になる覚悟で、今の部活に当る剣道部で腹ペコで竹刀を振り回していたのが終戦で一変、軍国全体主義から自由民主主義時代となり、教職員や私達も将来どうなるのか茫然自失、価値観の変貌に途惑うばかり、昭和二一年、昭和天皇が当校に御臨幸になり焼け残った物理教室でお迎えしたのも想い出の一つです。

昭和二三年三月、六・三・三制とかで岐阜一中が岐阜県立第一高等学校に、更に八月、岐阜高等女学校が統合され私達のクラスにも、うら若き乙女が机を並べました。校章も桜の中の「中」が「高」となり教科も一変、部活も武道的なものは一切禁止、何か一科目とらなければいけない選択科目で私は音楽をとり、それまで軍歌と校歌か応援歌ばかりで音符も碌に読めないまま、岐高女の岩田しん先生に混声合唱団員としてしごかれまし

た。その秋に市公会堂で第九の「歓喜の歌」を歌ったのも遠い思い出、その後大学や一般の混声合唱団で歌い続けた仲間との交流は今でも続いています。

昭和二四年四月の「学区制」、新制高校のレベルを平等公平にする目的とかで商業高校も含めて全学生を小学区制で再編成され、当時金華小学校区の私は岐中は卒業、岐高は二年修業という形で新制長良高校へ転校、同校の第一期生として昭和二五年三月、激動の中高校生活を終えました。

時は遷り流れ昭和四八年岐高が創立百周年記念募金の折に、事前に集まった同期の連中で、一五名ほど「岐阜一中会」を結成、年に何回かゴルフと一泊という会があつて現在も回を重ねて親交を深めています。

またその会から派生的に岐阜地区のメンバーが岐高女の方も参加されて増加し、お互い後期高齢者で閑にまかせて月に一度、同志会の名で昼食会をかねて集まりお互いの健康を確かめています。

いま中高一貫教育が評価されていますが、なんといつても中学から高校までの五年、六年の青春時代の交友仲間が夫々の永い人生の過程の中で、一番純真で想い出多き仲間であらうと思います。

本年六月一五日、岐高・岐

在京(首都圏)同窓会 七十周年を迎えて

宮本悠美子
昭和三四年卒

在京(首都圏)岐高高校同窓会は平成一九年度創設七十周年を迎えることが出来ました。これも先輩の皆様方のご努力ご協力のお陰と深く感謝

致します。平成二二年から新しく始まりました「当番学年制度」「会費(年会費含む)制度」「会報誌作製」「ゲストを迎えるの懇親会」

平成19年度 在京(首都圏)岐阜高校同窓会総会



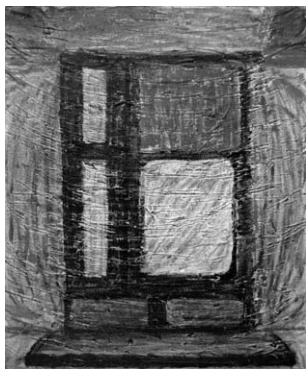
などが導入され年々盛会になってきております。毎年総会には母校同窓会会長・校長に來賓としてご挨拶を頂き大変嬉しく思っております。

特に一九九年度は創設七〇周年を記念して念願の在京（首都圏）岐阜高校校旗を作製出来ましたことは大きな喜びでした。

又当日は総会の後イベントジャズヴォーカリスト伊藤君子さんの迫力ある歌声に酔いしれ、懇親会では樽酒で鏡開きなど最後には檀上で古田知事（四一年卒）が中心となり全員が大声で校歌・応援歌を熱唱し一段と盛り上りました。一九九年度当番学年（昭和四一年卒・五一年卒）の皆様の素晴らしいチームワークで過去最高の二七〇余名の出席者が

あり大変有意義な楽しい総会・懇親会でした。

今年二〇年度は昭和四二年卒・五二年卒の当番学年が如何に盛り上げるかと努力の最中ですが、会としては現状を維持するのみでなく、年々新しい学年の参加が大きな課題となっており、現在年二回の各学年の幹事の皆様とコミニケーションを図り同期会の把握はもとより会費の納入も郵便局での振込みでは不便との声をもとに今年度よりコンビニでの振込みを採用し、総会により多くの学年の参加を期待し先輩後輩の絆を太くし「百折不撓の精神」の思いを一つにして只単なる親睦会に止まらず岐高パワーとし、より大きな意義ある会になっていきま



在校生2年 番匠 大貴

二十年年度の総会は次の通りで行います。
日時 七月一三日（日）
場所 ANAインターコンチネンタルホテル東京
ゲスト 張濱（チャンピン）
二胡の演奏を楽しみに致しております。
皆様の御参加を歓迎致します。

岐高四〇会讃歌

衣笠 宏允
昭和四〇年卒



青春時代を共有した過去の思い出が極めてセンチメンタルな郷愁としてよみがえり、人生の癒しを求めてくる者も多い。

よく言われるが、ヤクザも警視總監も同席するのが同窓会なのだ。

最近、一九六〇年代に書かれて我々を含む当時の世代に圧倒的な支持を得た柴田翔の「されどわれらが日々」「贈る言葉」が文庫本で再版されたと聞いて改めて読み直してみました。

あの時代に理念と愛と性の衝動に振り回されながら、不器用に、しかし、ひたむきに生きた、我々よりすこし上の青春群像が、生き生きとよみがえってくる。

では我々にとって六〇年代のあの時代の日々は何であったのか。

あの頃「恋の季節」という

歌が流行ったが、それは同時に大いなる「政治の季節」でもあった。

六〇年安保から七〇年安保への時代、ブントは半ば崩壊したが、新左翼が最も輝いた時代、日韓条約、ベトナム反戦、羽田、佐世保、大学斗争、10・21、そして全共斗。

東京オリンピック・新幹線・名神高速道路に代表される、日本の高度成長時代の真只中の光と影の時代、そして安田講堂陥落の年に多くが社会へ巣立っていったわれらが青春の日々。

おっと前置が長くなりすぎました。

次にせまってくる団塊の世代の魁として初の純粹の戦後生まれで構成するわれら四〇会もいつの間にか還暦の年さえ過ぎて、それぞれの人生の重荷を背負いながらも、思いがけない邂逅を追い求めて様々な会合を続けている。

主に岐阜市及び近郊在住のメンバーを中心に定期的な集まりとしては四月のゴルフ会・一二月の忘年会も開催し、体のどこが痛いとか、年金とか、親の介護とか、孫の話とか：

わりとしよぼい話を中心に柳ヶ瀬あたりで定期的に集り、おだをあげている。

もちろん、面倒な会則とか年会費の類は一切ない。

関東にも、名古屋にも同様の集りがあり、三年置きくらいに百人以上が集う学年同窓会を開催し、比較的まとまりが良いと言われている。

一方、既に二〇人以上が鬼籍に入り、毎年一人、二人と欠けていく世代となつてしまつたが、常に時代の節目を体験し、突破してきたわれら四〇会はまだまだ元気に仕事を継続している者が多い。

今回、われら四〇会は全体同窓会当番幹事学年として、三年振りに全国から結集する。あの時と同じく、友情と連帯を求め、さりとて「三丁目の夕日」以外のなにかを探しに。

同窓会「在京40会」

永田 和宏

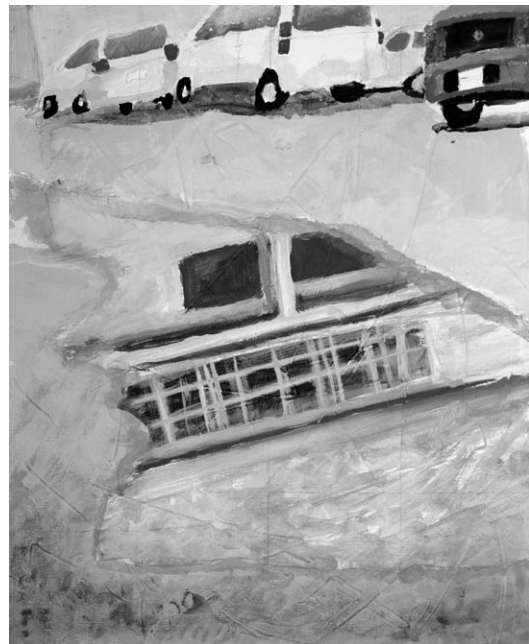
昭和四〇年卒



く歓楽街である。

会場の南国酒家別館は原宿駅前にすぐに見つかった。会場にはすでに同窓生が集まつていた。今日の司会は安原達次君である。高橋泰之君から開会の挨拶をやるように言われていたので、私が簡単な話をして直に乾杯となつた。後は近況報告となつた。安原君の名司会の下、皆の話が進んでゆく。今までの人生に一区切りをつけ新しい活動に乗り出す者、悠々自適の生活を樂しむ者、自分の道を突き進む者、健康の話、遊びの話、話は尽きない。いつものことながら、酒を樂しみ、人の話を聞きながら隣とおしゃべりが始まる。

昭和四〇年三月卒業、大学に入ったがすぐに学生運動の大きなうねりに入つて行つた。今年、岐阜の同窓会が六月一日に特別な思いをするのも全



在校生2年 日比野 聖司

共闘世代のなごりである。あれから三〇年以上が過ぎ、皆、顔は年相応になつたが、話し方や身のこなしは高校時代と全く変わらない。岐阜高校でお世話になつた先生の名前が話に出てくる。しかし、私には先生方の顔は思い出されるが、困つたことにあだ名ばかりが出てくる。

四〇年卒の学年在京同窓会を持った。全体の在京同窓会は皆の努力で盛会となつたことは喜ばしい限りである。時間的余裕ができたこともあるが、たびたび学年同窓会で皆に会えることは楽しみである。

この間、朝日新聞論説委員の小池民男君、旧くから在京女子の同級会と同窓会の中心となり男子の同級の集まりとの橋渡し役をされた中村(佐光)慧美さんが亡くなられた。ご冥福をお祈りする。最後に、今回は六月の岐阜の同窓会で会うことを約し、参加者二二名で記念撮影をした。

桜会

安井 順子(旧姓・篠田)

昭和四〇年卒



入学後最初に驚いたのは、運動場の片隅の三教室ほどの木造の校舎です。今でも冬になると、雪が吹き込みそうな寒い教室を思い出します。天氣の良い日は、昼休みに教室から出て、暖かい堤防でクラスの間と話をするのが楽しみでした。



その仲間は卒業後、東京に出た後、今では揃って名古屋で暮しています。お互い子供が小さい頃は、それぞれの家を訪れ交流を続けていました。卒業後二〇年程して、いつもの仲間と相談して、名古屋近郊に住む女性の同窓生を誘って食事を開くことにしました。

十数名の同窓生が誘いに応じてくれ、第一回の食事は東急インで開催したと記憶しています。岐高卒業以来の再会となる同窓生も参加して、懐かしさで時を忘れるほどでした。

会の名称は岐高の桜のバツジから桜会とし、今に至っています。グルメな友人が食事のおいしいお店や、評判のお店を探して、会場選びを手伝ってくれています。あまり出歩くタイプではない私にとっては、新しいお店に出会える

チャンスです。

桜会のメンバーの中には、岐高四〇会ゴルフクラブに参加されている方もいて、私も感化されてゴルフ教室に入り練習を始めました。でも長続きせず、ゴルフセットは納戸でホコリをかぶっています。

私にとっては楽しくもあり、刺激を受ける桜会ですが、最近忙しくなった友人が増え、昨年は開かれないままとなりました。寂しく思っていました。世話をかけて出てくれた二人のおかげで、二月八日に桜会を開くことができました。おいしい食事もそこそこに話して夢中になってしまいました。

卒業後何年経っても、岐高時代に帰って話ができる桜会が、いつまでも続くよう皆で協力していきたいと思っています。



「次の会」のこと

大塚 泰子

昭和四〇年卒



ります。

とにかくユニークな先生で数学の授業中に黒板に数式を書きながら、プユツとチョークを悪さをしている生徒目がけて飛ばしたり、早く授業が終らないかとチラッと腕時計を見ると、「〇〇、オメーエエ時計しとるナー」と皮肉を言ったり。鋭い眼光でギロツと睨まれると身が縮む思いでしたが、ユーモアあふれる先生でした。

「岐高の一年生のときの同窓会なのよ」と言うと、みんな一様に驚かれます。「次の会」は昭和三八年岐高高校一年四組の同窓会なのです。

名前の由来は、恩師、中島次夫先生から頂いたものですが、この名を付けたのは、中島先生が数年前に亡くなられてからなので、当の先生は、自分の名が同窓会に付けられていることはご存知ないことにな

ある日、教室へ入るなり、「今日の先発は村山です。」と言われ、キョトンとしている生徒を横目にふつうに授業がはじまりました。先生は熱烈的な阪神ファンだったので、今考えると、平日の試合だったのかな。と、もう四〇数年前のことです。

九月の全校球技大会では、教職員の野球チーム相手に、先生を筆頭に大活躍して勝利

したり、バレーボールでは、三年生を倒したりと、教室にはトロフィーがたくさん並びクラスが一致団結して盛り上がりました。

在学中から養老にある先生のお宅へ度々お邪魔していましたが、卒業してからも、数人で集まっては何度となくお伺いしていました。

そのうちに年に何度か飲み会で集まるようになり、自然発生的に一の四の会が生れたというわけです。

今年の一月には、ついに蒲郡への一泊旅行を実現しました。同級生のご主人の会社の保養施設を利用して頂き、海の近くの景色のよい所で豪華なカニ食べ放題です。ところが



在校生2年 神谷 祥平

実際にカニの大盛りをおかわりしたのは一組だけでつくづく年を実感させられました。総勢一六名(うち女性五名)の参加でしたが、名誉会員(常に一緒に飲み歩いていて、会員が認める人)や、特別会員(同級生結婚の人が四名いるのでそれぞれの配偶者)など今後参加者は増えそうです。この会が長続きするのは、何といっても男性二名のおかげです。岐高時代の校章、豆単などいろいろなものを未だにきちんと保管していて記憶力抜群の後藤君、人付き合いが良く人との連絡をこまめに取ってくれる衣笠君、ほんとうに感謝しています!

「名門(?)」 岐高40会ゴルフ会について

後藤 郁夫
昭和四〇年卒



40会活動の一環として、勝手に「40会ゴルフ会」を名乗って、今こそゴルフデンウイークの四月末に定期的にプレイを楽しんでいるが、(最近近は岐阜関CCが多い。)当初は、ゴルフ好きが集まって自然発生的にスタートし年一〜二回不定期に開催していたもので、会則なるものも過去からの成績・メンバー推移などの記録も何もない。(当然ながら、参加者全員の記念写真もないので掲載も出来ない。)従って某国の「年金納付記録」と同様(?)、当会の「戸籍謄本」がないということ。「およそ二〇年前」というあいまいな記憶だけで正式な記録は誰も正確に言えないという名門(?)の割には珍しい会合。それでも現在登録メンバーは東京勢含めて約四〇名(うち女性五名/会員名は後記広告に掲載)で毎回開催を呼びか

けると大体六〜七組くらい揃うから会としての一応の体裁は保っている。参加者が一堂に会するのも終了後の表彰式・軽食のひと時だけで、これが同窓生の旧交を温め、情報交換する貴重な場となっている。その他、ハンディキャップもダブルペリア方式で手間もかからず、全て成り行き任せという基本方針なので衣笠、山田(謙)両君と小生の無精な幹事3人組で何とかお世話をさせてもらっている。要は本ゴルフ会の役割は、ゴルフレベルの向上、コンペティションを図るのではなく、年末開催の40会忘年会(「年末で女性是一家事多忙」という旧い理由で昔から男性のみの参加: 今後は女性にも門戸開放を!)とともに40会同窓会全体活動における「ホルダー(プロ野球の)」的なものと位置づけ



今年には東京勢の本同窓会総会出席を図るため総会前日十四日に順延して開催することにしている。(二〇年前も同様な開催で、前夜祭も盛大に行ったと記憶している。)今後は同窓生自身の高齢化が進みもう少し暇になってくると思われるので、会員増強や秋にも開催をするなど前向きな活動もしたいと思っている。ちなみに当ゴルフ会のレベルなどを若干情報開示しておく、「バスト七〇台、ワースト百五〇台もあるが、概ねグロス九〇台〜百一〇台(女性百三〇台あり)、概してお医者さんや自営業がうまく、銀行員はうまくない。」という風に誰でも気楽に参加したくなる程度です。参加希望の方(特に女性)は幹事まで是非ご一報いただきたい。(まだまだゲートボールやグランドゴルフは早いはず!)

笑顔と感動の再会

篠田 達郎

昭和五〇年卒



平成一八年二月二日(日)に昭和五〇年卒業生の同窓会を岐阜市内で開催しました。この会を開ききっかけは、

「プレ同窓会」を開催が急に決まったこともあって、どれだけの人が集ま

るか心配でしたが、当日は七〇名近くの仲間が集まりました。また、会に参加できなくても、ホームページに近況を書き込んでくれた仲間も大勢いました。

当日は、畏友松波英寿君の「我々の世代がリーダーシップを取るべき時代になってきている」という力強い開会の挨拶で始まり、三〇年前の高校時代に戻ってあちらこちらで歓喜の声が飛び交いました。また宮崎代里子(旧姓・浅見)さんとそのお弟子さんたちによる津軽三味線の演奏で大いに盛り上がりました。宮崎さんは、海外でも数多く公演経験があり、その演奏は心の琴線に触れる響きでした。宮崎さん、本当にありがとうございました。

次に、全員の一言スピーチが始まりました。さすがは岐阜高校の卒業生、一分間という短い時間ながら、実にウィットに富む内容で、素敵な齢を重ねてきた仲間たちの人生が凝縮されたスピーチが繰り広げられました。そして、締めは校歌斉唱と、我らが応援団長高橋威(旧姓・渡辺)君

の音頭で「フレック・フレック・ギコー」のエアール。岐阜高校時代の三年間が、人生の中で本当に価値ある時間であったことを再認識した笑顔と感動の再会でした。

この拙文を、昭和五〇年卒の卒業アルバム編集後記で結びたいと思います。

休み時間は親単・山貞に追われ 灼熱のもとで額に汗を浮かべ

◇ ◇

木陰でそよ風に吹かれながら「愛」を語りあいたかったあなた

喜び、悲しみ、怒り、楽しみ そしてさわやかな青春の香りとともに

この小冊子が あなたのなつかしい思い出と 新たな出発への原動力に。

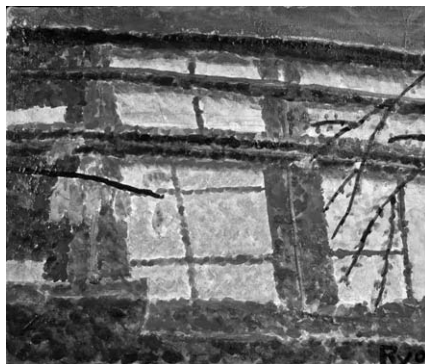
法にしました。一月に学年同窓会のホームページを立ち上げ、そこで友人の出欠状況や近況のコメントを書き込んでもらう「プレ同窓会」を楽しみました。

開催が急に決まったこともあって、どれだけの人が集まるか心配でしたが、当日は七〇名近くの仲間が集まりました。また、会に参加できなくても、ホームページに近況を書き込んでくれた仲間も大勢いました。

この拙文を、昭和五〇年卒の卒業アルバム編集後記で結びたいと思います。



在校生2年 横山 昂



在校生2年 福田 峻